

# 研 究 集 会 報 告

第1回（6月11日）

どこまでを言語と認めるか

——構造主義の幻想——

国広 哲弥

言 語		
論	情	認
理	緒	知

左図で「言語」とした部分は、むかしアメリカ構造言語学で考えていたもので、表に現われる部分だけを指す。ソシユー

ルが考えた言語構造も、概念より先に“自律的に”存在するとする記号体系に基づいているので、この「言語」の部分だけを考えていたことになる。チョムスキーの生成文法はこれに「論理」を大幅に取りこんだものである。論理能力は人間に普遍的に備わっているものだから、生成文法が普遍文法の様相を帯びるのは当然である。しかし論理だけでは言語現象の全貌をとらえることはできない。意味・表現の面を見ればそれは明らかである。言語以前の外界認知のしかた、つまり認知心理学で扱われることと言語は切り離すことはできない。上図の「認知」のかなりの部分は言語に属させるべきである。語彙が人間の外界認知を反映していることはいうまでもないが、意味現象のあるものは論理の働きによると考えられる場合がある。英語の‘for’が《目的》と《理由》を表わし、日本語の「ため」も同様であるのはけっして偶然ではなく、裏に同じ論理が働いているためだと考えられる。‘without’も文脈によって《状況》「なしに」のほかに《理由》「ないので」、《仮定》「なければ」を意味するが、これも言語以前の論理の働きによるといえる。

ソシユールのように言語を上図の「言語」に限るのでは、言語単位の記号性を浮き彫りにするという効果はあるが、それ以上のものにならない。「論理」「認知」「情緒」も含む言語を考えるべきである。